

へいあんきゅう だいごくでんいん ひがしめんかいろうあと
平安宮 大極殿院 東面回廊跡

調査期間： 令和 5 年 4 月 3 日 (月)
～ 5 月 12 日 (金)

調査機関：京都市 文化市民局
文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

今回の調査地は、平安宮大極殿院東面回廊跡に該当します。大極殿は、^{まつりごと}政
の場である^{ちやうどういん}朝堂院の正殿です。^{しゅつぎよ}天皇が出御される重要な殿舎で、「天子南面す」
の言葉通り南に開かれ、北・東・西は回廊で囲まれていました。この東面回廊
の西半分が当該地を通っていたと推定されたため、文化財保護課は令和 5 年 4
月 3 日～ 5 月 12 日にかけて調査を実施しました。

2 周辺の調査成果について

平安宮の中でも最も重要な場所のため、周辺では多くの調査が行われ、東面
回廊のほか大極殿と回廊を繋ぐ東軒廊の範囲でも、複数の調査が行われていま
す。

千本通に面した昭和 58 年度の調査では、北面回廊の化粧石の一部が元の状
態を保ったままで発見され、回廊の北端の位置が確定されました。この成果に、
史料から研究された大極殿院の復元図を当てはめた推定線が提示され、今では
朝堂院内の様々な地点で、大きな^{むじゅん}矛盾無く、平安時代の遺構が見つかっていま
す。

平成 28 年度には、今回の調査地の南で東軒廊と東面回廊の痕跡が確認され
ました。ちょうど軒廊が回廊に取り付く地点で直角に曲がる溝を検出していま
す。東軒廊跡は北端と南端の溝が見つかっており、北面回廊の東側も北端と南
端の溝が見つまっているため、この調査によって東面回廊の位置が推定できる
ようになりました。



3 今回の発掘調査成果

今回の調査では、調査区の南東端で、平安時代中期の瓦溜^{かわらだめ ぎょうかいがん}と凝灰岩片を多数含む整地層を確認しました。残念ながら回廊の西端を示す延石^{のべいし}や抜き取り溝は、江戸時代の土取り穴^{つちと}等によって見つかりませんでした。しかし瓦溜が回廊から少し外れた位置で検出されたことから、回廊の改修にともなって古い瓦を廃棄する土坑^{はんちく}を掘ったことがわかりました。

整地層は、薄く土を重ねて叩き締める版築^{はんちく}工法で造られていました。また整地層の上から凝灰岩を多数含む土坑が掘られていました。瓦溜と土坑は共に整地層より新しい時期に掘られたものであり、約400年続いた平安時代に何度か修理された文献の記載を裏付ける成果を得ました。

今回の調査では南北方向に延びる回廊を探すため、3区画の調査区を設けて調査を行いました。平安時代の遺構が見つかったのは一番南の3区だけでした。この理由は江戸時代に埋められた土取穴と堀によって平安時代の遺構が壊されていたことによります。

土取り穴は「聚楽土^{じゅらくつち}」と呼ばれる建材を採取したもので、平安宮跡ではよく見つかります。それに対して大きな堀は、想定外の遺構です。堀は東西方向で、深さは3.5 m以上ありました。幅は調査地内で約11 m、調査地の北端が中央部分と推定され、実際の幅は約20 m以上あると考えられます。固く叩きしめられた地層で埋まっており、その作業単位から計画的に埋戻しが施工されたことがわかりました。

江戸時代前期に埋められていたことから、掘られたのは戦国時代～安土桃山時代に遡ると考えられ、近くには同時期に築城された聚楽第があることから、その関連の可能性を推測させます。

平安宮跡の調査は調査面積が小さく、点の積み重ねを何年も集めて様々なことを考えていきます。今回の調査でも、これまでの成果につながる平安宮の整地層と将来の課題である大きな堀という重要な手がかりを得る事ができました。

(赤松佳奈)

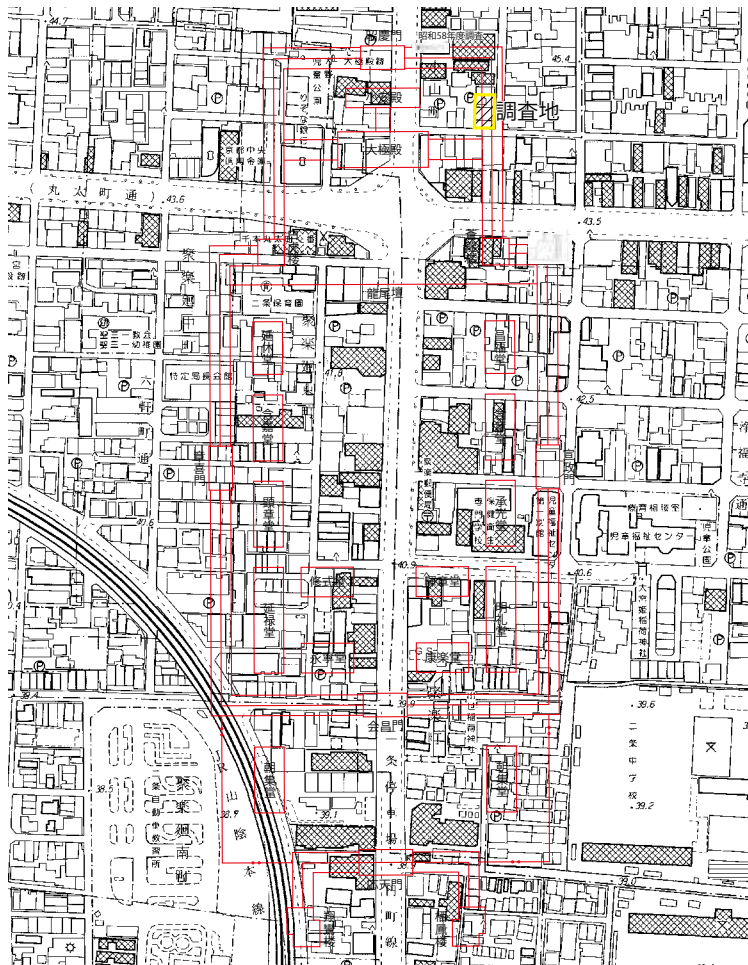


図1 朝堂院跡復元図と調査地



図2 北回廊の凝灰岩（昭和58年調査 北東から）

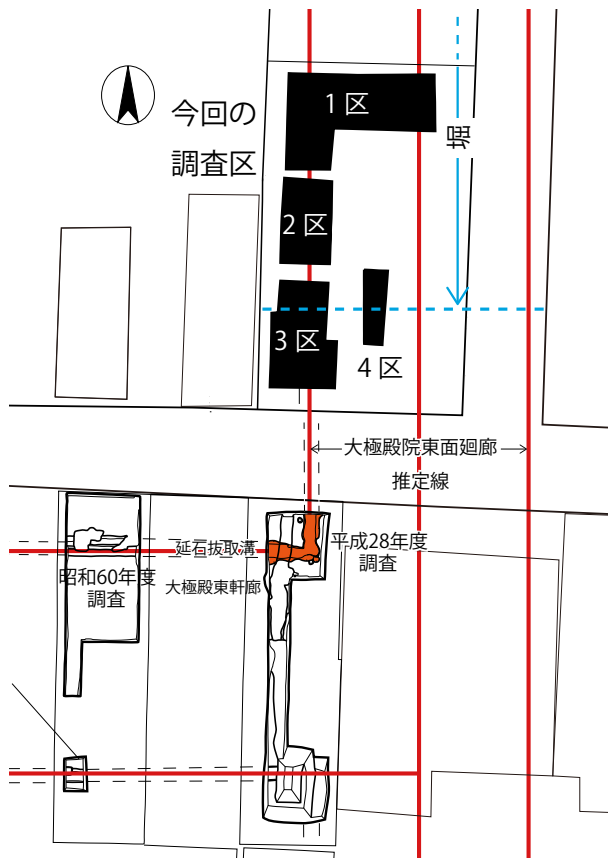


図3 回廊推定線と調査区配置図



図5 3区全景（平安時代の瓦溜と整地層および江戸時代の土取穴 北東から）